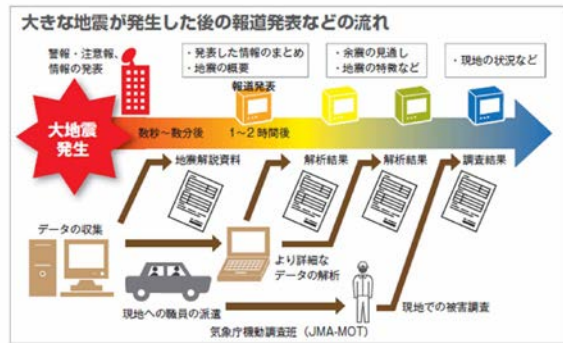


情報に振り回されないために

災害時には、インターネットやうわさ話等で、不確かな情報が流れ、誤った行動につながることも考えられる。また、確かな情報が流れても、正しい行動につながらない場合もある。情報との適切な接し方について考えてみよう。

1 信頼できる情報を得るために

災害発生時に最も信頼できる情報は、公的な機関が発表しているものである。ただし、公的な機関のホームページや指定避難所の掲示板等は、素早く情報を入手できないことがある。そこで役立つのが、新聞やテレビ、ラジオといったマスメディアである。東日本大震災の際には、停電が続いたこともあり、ラジオが重要な情報源となった。速報性という点では、メールやツイッター、SNS等も有効だが、情報の発信元や正確さに十分注意し、それらの情報に振り回されないようにすることが重要である。

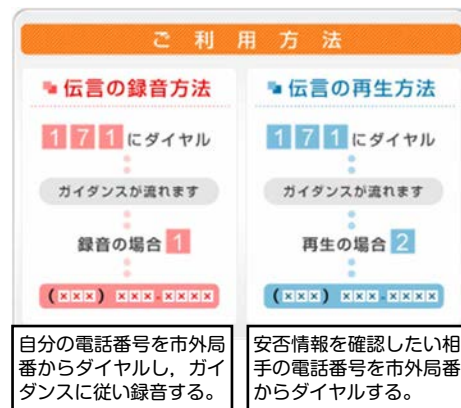


大きな地震が発生した後の報道発表などの流れ

2 災害用伝言ダイヤル（171）を活用しよう

地震等の災害発生時には、家族や知人の安否を気遣う通話が増加するため、被災地では電話がつながりにくくなることもある。そのような場合に有効なのが災害用伝言ダイヤル（171）である。30秒以内の伝言を、1番号あたり最大10件蓄積することができる。

毎月1日と15日、正月三が日、防災週間（8月30日～9月5日）、防災とボランティア週間（1月15日～21日）には体験利用も可能なので、家族で練習してみよう。なお、各携帯電話会社にも同様のサービスがあるので確認しておこう。



災害用伝言ダイヤル(171)

3 災害心理について学ぼう

過去に起きた災害について調査していくと、確かな情報があったにもかかわらず、避難等に結び付かなかったケースがあることが分かってきた。災害時に見られるバイアス（偏見、先入観）等の人間心理について学んでみよう。

●正常化のバイアス

多少の異常事態が起きてもそれを正常であるかのように捉え、心を平静に保とうとする自己防衛の働きのことを指す。しかし、この働きが行き過ぎると、非常事態でも危険を無視してしまい、「大丈夫だろう。」と考えて災害発生時に避難しないという反応になってしまう。1982年（昭和57年）7月22日に起こった長崎豪雨水害では、その年に何度か出された大雨洪水警報で大事に至らなかったため、「警報を信じなかった。」と答えた人が多く、大惨事となってしまった。

●多数同調性バイアス

過去に経験したことのない場面で迷ったとき、周囲の人と同じ行動をとろうとする心の働きのことを指す。災害発生時には、周りが誰も逃げないから逃げる必要がないという判断に陥ってしまうことがある。2003年（平成15年）2月18日に韓国の大邱で起こった地下鉄火災では、車両内に煙が充満し、危険な状態であったにもかかわらず、乗客が座ったまま、逃げなかったという例がある。

●先延ばしバイアス

自分にとって不利益になる判断を行わずに、面倒なことややっかいなことを「そのうちにしよう。」と先延ばしにしてしまう心の働きのことを指す。災害発生時には、避難を始めるという判断をせずに、「外は危険だから家にいよう。」などと、今いる場所にとどまるといった行動につながってしまう。

? 考えよう

○災害発生時の情報収集と判断の仕方について、日頃から考えておくべきことを、グループで話し合ってみよう。